

元禄國絵図に關する

新資料について

弘前藩の場合

羽賀興七郎

はじめ

徳川時代における全国的な國絵圖の作製は正保元年（一六四四）に始まる。すなはち正保元年十二月二十五日幕府は各藩に命じ、その國絵圖と居城の絵圖を調整せしめ、明暦二、三年（一六五五、一六五七）頃、官庫に收められたのである。⁽¹⁾

家光、家綱の時代に涉り作製されている。然し正保國絵圖において、縮尺一里を六寸としていても、一里は各國により四二丁・三六町等と異長を異にするので、縮尺の不統一があつた。ついで綱吉の時代、元禄十年（一六九七）に一里を三六町とする

る改訂を諸侯に命じ、全十五年に完成し、それと共に鄉村帳を提出させた。元禄國絵図作製の詳細についてすでに知られているが、筆者は弘前藩日記により、作製の進捗状況・隣藩との交渉情況等を知り得たので、本稿を籍り述べようとするのである。⁽²⁾

註(1) 河田 熊「本邦地圖考」(『史學雜誌』六)

四)、秋田武次郎「日本地圖史」頁二〇、八一

二一〇。『好書故事』(近藤正吉全集所收)

参照。

(2) 前掲「本邦地圖考」、『好書故事』、高木南

三郎「日本地圖測量小史」参照

(3) 國絵圖を諸候に作製せしは、元祿に全國の郷村
帳を完成させたことは幕藩体制の強化といわ
れる。(伊東多三郎曰日本封貢制度の四章
参照)

(一)

元祿十年(一六九七)閏二月四日弘前藩御前殿
勝本殿左内は評定所において、寺社奉行永井伊
賀守・井上大和守・松平忠摩守・大目付仙石伯耆
守・西奉行能勢出雲守・川口攝津守・勘定頭松平
美濃守・稻生下野守・井戸對馬守・萩原近江守刻
座を仙石伯耆守より國絵圖改訂の上差上げべきこ
とを命ぜられた。

先年被差出候國絵圖不具候旨、此度被仰渡
候間、隣國申合。委細之絵圖仕。差上候様ニ
と御奉行中被仰渡候。

と勝本は藩邸に復命している。それと同時に、先
年差上げた正保國絵圖は必要により借渡すること
を申渡されている。同日評定所に出頭したものは、
松平肥後守(会津)。松平陸奥守(仙台)。南部

信濃守(盛岡)。松平大和守(白河)。丹羽左京
大夫(二本松)。秋田信濃守(三番)。内藤起輝
守(備前)。河原能登守(盛岡)。相馬彈正心弼
(中村)。上杉彈正大弼(米沢)。津輕越中守(弘
前)。堀田伊豆守(山形)以上十二人の奥羽地
方の御前役であった。

弘前では諸手定輕頭關清助は三月五日に江戸参
の命を受け、全月十五日弘前を出発、四月一日上
着している。上着の日彼は勘定奉行平井九郎と
二人が絵圖係として任命されたことを知らされた
のである。

四月廿五日繪圖に關する事、江戸参上において諸候の

御所に渡されし。この日の江戸日記には

一今曉於御評定所、御絵図御書付御渡被成候
節、勝本藤左征門（御南役）御書左記之。
於御評定所、御呼出候順、御国持次ニ拾万
石以上、其次ニ

小笠原	修理大夫	様
水野	隼人正	様
松平	伊豆守	様
牧野	駿河守	様
戸沢	能登守	様
本田	應岐守	様
松平	丹後守	様
内藤	紀伊守	様
内藤	能登守	様
相馬	彈正少弼	様
殿様		
秋田	信濃守	様
中川	四幡守	様
浅野	内匠頭	様

浅野 土佐守 様
殿坂 淡路守 様
加藤 遠江守 様
伊東 出雲守 様
稲葉 能登守 様
龜井 應岐守 様
右順々御南役罷出、一同ニ被仰渡承候。此次
大勢罷出之君御座候。

（以上略）

とあり、勝本は書付（三通）受けとつてゐる。
（4）

五月廿日朝井上大和守内青羽庄兵征。松倉文右征
門から、廿二日追手門の勘定所で四時から九時ま
での間に、国絵図を渡すよう勝本に連絡があつた
が、後刻井上大和守内長濱治左征門から取止めの
連絡があつた。⁽⁵⁾ ついで六月二日には井上大和守内
林伊太夫から連絡があり、翌三日勝本と奥水同
道して勘定所に参上、平野次郎左征門、細田伊左
征門、町野新兵衛列座で、国絵図壹枚、郷村帳壹
冊、書付三通をうけとつて帰つたのである。⁽⁶⁾

同日、御国絵図奉行関治助、絵図係として絵師今村井元、片山吉左衛門（後養和と改）が任命され、伏兼部屋は御用人長屋と定めた。⁽⁷⁾

六月四日井上大和守内青羽庄太夫、松倉文右衛門から連絡あり、勝本が参上したところ「壹里塚分割一里三六町六寸の縮尺に統一すべきこと」を申渡されてゐる。⁽⁸⁾ ついで六月十九日には借渡されてゐる国絵図と細村帳を勘定所に勝本と関は返上した。⁽⁹⁾ 六月廿七日には絵図の複製をするよう関は命ぜられ、御国役勝本は幕府との連絡係に命ぜられてゐる。⁽¹⁰⁾

七月廿五日次のような廻状が御国役のところに来た。

御国絵図之細帳認様之事、湯島具雲寺前御絵図小屋、明廿六日以後勝手次第四時ト八時迄之内御出姿細二様子被相尋被認候様ニハ大和守申候。以上

七月廿六日

井上大和守内

長濱

治左衛門

津輕越中守様

御苗守居中

追而、左之通ニ候得而、爲御届不及御出之由。⁽¹¹⁾ 石の廻状によれば、本郷絵図小屋は七月頃具雲寺内に設けられてゐる。七月廿七日には廿五日の廻状の通り勝本、関の兩人は絵図小屋に参上、細帳の書き方を平野、町野列座で示されてゐる。その写を示すと

何國郷帳

何国何郡

一畠 何百石

何村

一畠 何百石

何村

一畠 何百石

何村

何村之内

一畠 何百石

何村

一畠 何百石

何村

小畠何万何千石

何郡何拾ヶ村

何郡

一畠 何百石

何村

一畠 何百石

何村

一畠 何百石

何村

何村之内

一畠 何百石

何村

一畠 何百石

何村

一無畠

何村新田

小畠何万何千石

何部何拾ヶ村

高部合何拾何万石

年号 月日

誰

である。

元禄十年八月八日（江戸日記）

一勝本議左内持参書付左記之。

御取次並口上之覚

一津輕越中守領内、古絵図道程四拾八丁壹里を

六寸之續りニ御座候。

一佐竹右京大夫様御家へ古絵図道程相尋候処、

三拾六丁壹里を六寸之續りニ御座候由被申

候。

一南部信濃守様御家へ古絵図道程相尋候処、

四拾式丁壹里を六寸之續りニ御座候由被申

候。右有差日御尋ニ付、如此御座候。以上。

八月十日

津輕越中守内

勝本

議左衛門

道程之覚

一東西

四拾式里

一南北

式拾里余

道程四拾八丁壹里ニ御座候。田方ハ三拾丁壹里

ニ御座候。以上。

八月十日

とあり、勝本が井上大和守に持参したもののようであるが、当時隣国において、津輕領内においても一里の町数が不同ではあつたが、大の倍数であつたのである。

九月四日勝本と関は評定所に参向のところ一里三十六町と決定の旨を聞き、九月廿九日は、一里塚は四十八町のところ、今回三十六町にする旨を勝本が井上大和守に報告してゐる。

元禄四年（一六九一）二月測量家金沢勘右衛門は浅虫白根崎より発する山嶺に沿うて高森山・大毛姫山・三角嶽に至る稜線一帯を測量し、二月末着害してゐるが、一里三十六町であつた。元禄七

八年（一六九三）に渉る郡中道程検地
 において一里三十六町であつた。

元禄七、八年の領内道程検地において一里を三
 十六町として分木を打つてあるので、道程の悉し
 いところは上らせるよう十月廿八日圓老に手配し、
 十一月七日には勝手本は井上大和守より郷村帳一冊
 を再々借りうけた。絵図作製と多少進捗して未だ
 ようである。

註(1) 江戸日記元禄十年閏二月四日の条、御國

日記元禄十年閏二月廿六日の条参照。

(2) 御國日記元禄十年三月五日、全三月十五

日の条、江戸日記元禄十年四月朔日の条参照。

(3) 江戸日記元禄十年四月朔日の条参照。

勘定奉行平井に対しては三月廿三日に絵
 図係を命じている。平井は津野の山野に詳
 しい故、採られたのである。（江戸日記元
 禄十年三月廿三日の条による。）

(4) 徳川実紀は元禄十年四月廿八日の条に、
 このことを記している。なお実紀は書付の

内容をも説明している。

(3) 江戸日記元禄十年五月廿日の条参照。

(2) 石岡六月二日、三日の条参照。

(1) 石岡。

(8) 江戸日記元禄十年六月四日の条参照。

(9) 全 六月十九日の条参照。

(10) 全 六月廿七日の条参照。

(11) 全 七月廿五日の条参照。

(12) 全 七月廿七日の条参照。

元禄十四年辛巳年四月之如である。国絵図御
 改付書上々帳陸奥国津野領契其外相改之
 候目録には

陸奥国津野領 一郡

一、奥州五拾余郡之内、津野郡一團致領知候得
 共、古来か 三郡御絵図御郷
 帳ニ成書記候ニ付、石之通相認奉同候処、奥
 州之内、右三郡無之郡故、此度右津野一郡ニ
 相認可申旨被仰付、其通仕立申候事

とあり、津野三郡は一郡に書改めてゐる。従つ
 て元禄十四年十一月、陸奥国津野領郷帳一冊に

には

津輕郡

一 高百三拾四石三斗七升

段岡村

(中 略)

一 高三拾石式斗三升

鶴元村

一 高八拾三石六斗五升

小泊村

高都合拾万三千九拾七石五斗五升

村数三百三拾六ヶ村

津輕 越中寺

元禄十四、辛巳年十一月

と右の形式で書上げられてゐる、

(13) 全元禄十年九月四日、九月廿九日の系参照、

(14) 此絵図は日本測量術史上貴重なものであり、

筆者の別稿「測量家金沢勘右衛門について」

に紹介される予定、

(15) 御国日記元禄七年三月十五日、全八年四月

十一日、江戸日記元禄十年十月廿八日の系参

照、

(16) 江戸日記元禄十年十月廿八日、全十一月七

日の系参照、

(二)

元禄十一年(一六九八)正月十四日御内役勝本

は井上大和守宅に参上したところ、取次長濱治左

征門を通し、領内の給地絵図と郷村帳を今回別途

提出するよう嘆息があるが、一國または一郡と

纏めて差上げるように、且又正保の古絵に支地が

あれば其旨を書上げるよう注意があつた、全月

三十日勝本は井上大知守より絵図一通と書付三通

を受けとつてゐる、これは絵図奉行関にと渡され

てゐる、関の依頼、事務は困難であつた、江戸日

記八月十五日には

一 関治、介儀、方々様御国絵図之訳、勝本殿左

衛門承合候所、中々將明不申由書付差出候付、

若敷様江奉伺候処、差下候様ニと被仰出、今日

爰元相立申候、

とあり、依頼、事務の不明のこと多く、八月十五

日御国下りをしたのである、全月廿九日関は着込

してゐる、ところが、十一月廿日絵図の不完未で

閉門を申渡之れ也。申渡之實は

於江戸從御用人御用之儀申渡之大切之義因
等、致持參。於御当地早速不申上儀。無謂
法之至。曰虞之所存相知候ハ被慰召候。依
之南門被仰付候事。

十一月晦日

壽社舉行

山中次郎九郎

御
目
付

手塚茂太夫

15

竹內甚左衞門

右三人治助宅江參寺社奉行可申渡事。

であり、国絵図依製に關する書類の報告を遅延したのである。この日郡奉行対馬万石役門と内門(4)とされてゐる。南の内門期間は一七〇五年（一七〇二）七月十日内門御免、全年八月一日初めで御目見してゐるのである。

十二月上旬御持槍奉行塩崎治部左衛門は国^へで
 国絵図奉行に任命され、国^へで絵図を複製したの
 である。翌十二年五月廿六日、十五日辰で上着す
 るよう命をうけ、肉^のの持参した書類残らず所持し
 て廿八日弘前を出発した。肉^のの取務怠慢のため

絵圖の複製は遅れたのであるが、十一年十二月頃諸侯より幕府に提出された絵圖数も少く、提出情状は良好でなかつた。その頃下絵圖は完了し、清書中のものへ清絵圖へ六侯・下絵圖の検査中のもの五侯位あり、残りの諸侯よりは、絵圖役人に何の連絡もない。大勢援出しそうな時期を連絡するとの絵圖役人長濱岩左衛門よりの情報が、江戸郎より聞えに達されてゐた。従つて弘前藩は全国的に遅れてゐる訳ではなかつたのである。

註
三三

江戸日記元禄十一年正月十四日
同日藩主信政は在邑中てありそのにめ去
同藩主信政は在邑中てありそのにめ去

(4) 御園日記元禄十一年壬午臨日の条参照。南の

氏ある理仕由に
三が方不宣
月否とあ
かあり
明国給
示四作
さ水
て
の
い
庚

[illegible]

見内出の
出の画
で絵が
作図
反作
の製
の奉
吉た行
章めと
三
野
王外
の作江
金業戸
置は並
か着す
右日る
行記
口之

元壽見
泰水之
二真徳
年勿領
有内綏
進西專
星作三
安製五
也と區
等崎岳
のの清
の參基
込如昨
要し徹
主白丁

たの
ため
か、
益
の
清
書
の
み
見
出

同元禄十二年正月四日の条参照。

100

(三)

元禄十二年(一六九七)六月、塩崎は上着して
いる。八月十九日絵図係として、須藤五郎大夫(御用人)塩崎治郎左衛門(御持槍奉行)勝本藤左衛門(御内後)の三人が江戸において命ぜられ、佐竹領の端
絵図(隣藩との境界図)が塩崎に渡された。

九月十三日には勝本は本郷絵図小屋に承合のため
め遣りされ、同九月四日には塩絵図につき勝本は
佐竹侯と打合したが、そのため、絵図の訂正すべ
き箇所を生じたのである。十二月六日には秋田藩
の御内役より塩絵図のことにつき近日打合せ度い
旨勝本に連絡あり、南部塩絵図については塩崎と
同道して本郷絵図小屋の指不をうけるよう命があ
った。十二月十一日秋田藩の絵図役人大越敦賢を
塩崎、勝本の兩人が訪ね、塩絵図を承合している
両者の回答の大意は次のようである。

(1) 矢立峠と大田越間の境

佐竹側主張

碓氷道筋と大田越道筋は両者は合っているが
附近の山の形は両者は一致せず、津軽側の山形
は長い、佐竹側のものは絵図小屋の同済である
ので、此点相談したい。

津軽側主張

山の形が大きいのは先達佐竹側の主張通りに
引いたのである。

(ロ) 清水ヶ峠(現石の炭塚森)

佐竹側主張

清水峠は佐竹、南部、津軽の境であることは
延宝五年の公儀の墨引絵図で決定している。津
軽側の絵図では津軽、南部の境のように見える、
書き改められたい。

津軽側主張

三領の境であることは知っているが、水迄は
当領にあるので、清水峠は当領のものである。
絵図の書付は後で相談したい。

(ハ) 碓氷峠

佐竹側主張

津軽側の絵図では峠の二重のように見える。

これは双方の境ではあるが、矢立之形より東之峠は秋田領である。従つて矢立之形を境にして正保の絵図にもかいた。今回も正保の通リ絵図小屋の同着である。

津堅主張

当方と正保の絵図のように画いたのである。

(二) 大同越、境

佐竹勘主張

境明神の小川は古来より双方の境である。津堅側では明神までと道程を書付けてあるが差支がある。

津堅側主張

境は山の稜線であるので明神堂までである。以上のようになされたのであつた。

註(一)江戸日記を祿十二年六月の一冊は欠けたため到着日時調査不能である。

(二)江戸日記を祿十二年八月十九日の条参照。

(三)全 九月十三日の条参照。

(四)全 由九月四日の条参照。

(五)全 十月九日の条参照。

(六)全 十二月六日の条参照。

(七)全 十二月十三日の条参照。

(八)清水ヶ峠につき南部、佐竹の論山は長期に渉つてゐる。『大館日記』によれば「南部、鹿角郡と御境御論地は慶長十四年より起りて承応二年、大に混雜して、延宝五年相着と云へ。『秋田縣史』才二冊頁九八〇・三」とあり。『秋田縣志』才一巻頁二二九には「延宝五年四月十七日御検使談茶市左征門殿、中山茂兵衛殿、談茶源石征門殿、南部御領当領御領民御境目争論に付御訴に依て被指下、長木沢御境御見分、南部の方より御出。廿七日秋田を御通。『江戸之御登』とあり、同書頁二二に清水ヶ峠が境になつてゐることが示されてゐる。

御国日記延宝五年四月六日の条には

「南部、秋田論山に付、島上使、談茶市左征門様、中山茂兵衛様、談茶源石征門様御下之由。

全四月十七日の条には

一 碓氷山奉行外崎左五右衛門・中野源左衛門四月十六日志川の峠江羅越、秋田より角田主水并山見孫七同所江参出、志川が峠之儀衆に承合之處、此方にて申志川々峠相違之由委細書付有別紙、右之書付兩人持参。

全七日一日の系には

一 秋田、南部論山出入落着、秋田領江片付申由、鶴羽儀、佐竹石見方江主膳、弥右衛門、庄兵衛より飛脚遣之。

と掲げられてゐる。この外論山のことか『野内事實記』にも見出される。

『奥羽境矢立峠一巻』へ弘前市立図書館蔵）によれば寛文十年（一六七〇）三月十日矢立峠の双方の約定が成立してゐる。

神沢繁『藩祖佐竹義直公』頁六十六、には「元和

四年（一六八八）七月矢立嶺頭を以て国境とせり」と述べてゐる。『秋田縣史』中二冊頁一。

二五〇。三、にも元和三年佐竹、津輕の国境争が述べられてゐる。

(四)

元禄十三年（一七〇〇）三月三日絵図小屋役人細田伊左衛門・平野次左衛門、町野新兵衛^位から承り度いことがあるので出頭されるよう勝本に連絡あり、五日に参上することになった。^(一)三月九日秋田藩絵図役人大越敦貞より連絡あり、十日塩崎と勝本は大越を訪ねた。勿論境絵図のことである。四月六日には大越は、勝本、塩崎を未訪し、三人同道して絵図小屋を訪ねてゐる。^(二)

国絵図改訂の命が元禄十年であり、十三年四月になつて漸く秋田藩との交渉が軌道に乗つた状態であり、盛岡藩との交渉は進んでゐない。当時国絵図提出は弘前藩の場合遅れていて、絵図小屋役人より注意を受けてゐる。^(三)

その頃津輕領と南部領との領境清水ヶ峠より、十和田湖西洋の山嶺より膳棚山に至り、これより八甲田、島帽子嶺を通り、野辺地湾の狩場沢に止る稜線の全長とこの境稜線上の要所間の稜線の長さ

を塩崎、勝本は国迄に尋ねている。書面のみでは誤解を招くため、正保の絵図まで添えて尋ねていたのである。南部領境の稜線測定は依頼の用状は四月十二日江戸発、全月廿二日弘前に到着した。弘前では早速廿三日一組三人の見積係を二組任命し、一組は清水峠より、他の一組は特賜より調査を命じ、十日間で完了、五月二日に帰弘し、この調査の結果を五月六日江戸に送ったのである。また塩ヶ岡境と矢立之杉の道程と附近の絵図を八月廿五日江戸に送っている。

国絵図奉行塩崎は病氣のため、九月一日江戸発、御国下りをした。その代りに当時江戸詰の勘定奉行樋口理左衛門が八月廿七日絵図奉行に任命された。

すでに述べたように、南部領境の現地調査、佐竹領境附近の現地調査の報告と江戸で受取り、いよいよ弘前藩では改正国絵図の下書にとりかゝった。九月廿八日の江戸日記によれば、御肉役勝本、絵図奉行樋口はそのため、絵師荒井蕉竹、片山養和の外、絵図小屋出入の町経書を使用するこ

とを江戸詰家老大道寺隼人に申出、許可になつてゐる。十二月十六日には絵図小屋役人町野新兵衛、平野次郎左衛門、細田伊左衛門の三人に対し三十枚蠟燭百挺一箱宛、勝本個人として教子一曲宛贈り、また下役人押田彈右衛門、青木伝五郎の二人に対して、勝本、樋口の両人より金子貳百疋宛贈つてゐる。特に押田、青木の両人は国絵図の依製方を指導し、時には津輕邸に参り直接差図し指導したのである。

註(1) 江戸日記元禄十三年三月三日の条参照。

全 三月九日・十三日の条参照。

全 四月三日の条参照。

(5) 御国日記元禄十三年四月廿二日の条参照。

全 四月廿三日・五月二日の条参照。

全 五月六日の条参照。

全 八月廿五日の条参照。

(7) 江戸日記元禄十三年九月一日の条参照。当月廿四日着弘した。その後塩崎は病氣静養した。

たが全十五年六月十七日病死した。(御国日記元禄十四年九月二日全十五年閏八月十九日の条による。)

(10) 御国日記元禄十三年九月十三日の条。全三月十一日の条参照。

(11) 江戸日記元禄十四年十二月十六日の条。御国日

(2) 元禄十四年正月十二日ヲ参照。
江戸日記元禄十四年三月廿六日の参照。

(五)

元禄十四年(一七〇一)正月十五日御間役勝本
は井上大和守内受浜治左衛門を訪ね、南部領境
図の證文を交換し度い旨申出たところ、當時盛岡
藩においても境界を国元に問合中であり、分り次
ぎ連絡するとの返事であつたので、津輕側よりの
境繪図を長濱に渡して帰つた。(1) 正月廿八日には秋
田藩大和弥兵衛、大越勘更の二人勝本を訪ね、
盛岡國境につき談合してゐる。(2) 三月二日長濱より
連絡があり、勝本が参上したところ、先日津輕
側境繪図は南部側に承合させ、先方より返つたの
で返す旨、また南部側の境繪図を示され、異議な
ければ証文を授けよといわれたのである。然るに、
南部側境繪図には、畝ヶ湯、畝ヶ倉があり、畝
ヶ湯は津輕領にもあるので、これは將來論所と
なるため、此場所の写を江戸詰家老大導手筆人、黒
石役人嶋海孫兵衛等と相談の上、その場所が分る
よう繪図を書き直して、十四日再び長濱に提出し
たところ、長濱は事重大のため受取らうとしな

つたが、適当に処理するよう依頼したところ受取
つたのである。(3) このような隣藩との交渉は逐一
元へ報告され、処理されてゐたのであつた。此間
弘前藩の國繪図複製作業は着々進み、ついにこの
年十月廿日國繪図清書を勝本、種口の西人目道し
て井上大和守に提出したのである。(4)

御間役勝本は國繪図複製中、繪図小屋役人町野
新兵衛を屢々訪ねて指図を与えられ、今度下役人
押田彈右衛門は度々来郎して、作業を指導してい
る。(5)

十一月廿六日には御間端図二枚と海辺図、変地
帳を長濱に持参したところ、山々の名は幾ら不振
假名をつけよといわれた。(6) 藩日記元禄十四年十一
月までには右に述べた外、國繪図複製に關し記事
が見当らない。然し十一月付の「陸奥國津輕領御
帳一冊」と十一月付の「國繪図御改」付書上帳陸
奥國津輕領変地其外相改之候目錄」の写が現存し
てゐる。恐らく十四年十一月中に幕府に上尋を差
上げたものであろう。

『封内事実録』元禄十年の項には(8)

今年御領分給図之儀、御奉行が御渡被御書付之
 趣を以て、給図相借、写取、御領分交地番細并
 改、新村高分り候所、無相違相記。古給図平賀
 ・田舎、算知三郡ニ相記有え候。遂吟味候所、
 御朱印ニ津輕郡に有え候。予意右三郡奥州ニ無
 之郡政、今度相伺右之三郡相除、一津輕郡ト相
 記之候。国界、領界古給図相違之所ハ、薩國・薩
 領・人申合、山・川・道ニ後日双方違相知入候
 ・互ニ取替入下給図仕立、差上候所、御吟味え
 上、下給図入通無相違、若御給図仕立差上候儀
 ・被仰付。樋口違左衛門、賜本藤左衛門取え、
 とあり、要を盡しているようであるが、書頭の「
 今年」と書終の係役人については説明を必要とす
 る。これについては、すでに、述べたところから
 明らかである政二二では再び繰返さるゝ。

註(一)御国日記元禄十四年二月十七日の条参照。

(二)右全。

(三)全十五年四月八日の条参照。

(四)江戸日記元禄十四年十一月廿日参照。

(五)全 十四年五月三日の条参照。

(六)全 十一頁五入田書照。

(二)この二冊は弘前市ハ不精書賣家が所有してい
 る。

(三)津輕徳政公事録全巻にも右人迄開大が載せ
 られてゐる。

(六)

元禄十五年一七。二一正日十五日に給図係の
 給部片山襄和、今村朴元は御用公橋のため、襄和
 親三枚朴元銀貳枚買として頂いてゐる。二日廿七
 日には御國役勝本は道程表の提出を大目付安藤寅
 後守より命ぜられた。その内容は

一 雄城下か江戸迄之道程。但日本橋迄。

一 田之内雄城下か雄城下迄之道程。

一 一万石以上居所在之所か江戸迄之道程。

右同意

一 雄城下入所又ハ往還所道在入所ハ同様ニ書
 分々可被指出候。以上。

午二月

であつた。⁽²⁾このように国絵図の仕事が、元禄十五年にも涉つてゐる。樋口理左衛門は五月十九日御国下りをした。⁽³⁾十二月には幕府国絵図役人も国絵図成功の賞として時服または銀を頂いてゐるので、元禄十年令せられた国絵図改正は十五年に完了、前後五ヶ年の年月を費したのである。

改正絵図においては、縣・國・申合が強調されてゐる。佐竹領境の矢立峠附近の領境については佐竹、津輕は再三交渉し、南部領についても紛糾したのである。⁽⁴⁾遂に協定がなつて、隣藩互に印形の藩絵図を交換したのであるが、これは元禄十四年四月中旬頃と思われる。⁽⁵⁾これより国絵図の清書と絵図小屋役人の指導のもとに仕上げ、この年十月廿日に幕府に提出し、十一月廿六日に端絵図等を差上げてゐる。⁽⁶⁾

元禄国絵図複製に際して、清水貞徳創始の清水流測量術の普及あり、清水の弟子河原貞頼は美濃国絵図を複製してゐる。⁽⁷⁾亦るに私前藩の場合南部津輕領境の实地調査は見られるが、領内測量の主要は舊日記に見出さるない。金沢越前守門清水貞徳による貞享三四年

の国絵図複製(貞享元年より同三年に亘る領内総検地による簡略図複製、元禄七・八年の領内道程検地等により資料は十分あり、ためにその必要を認めなかつたのであろう)。

註1江戸日記元禄十五年正月十五日の条参照。

(2) 同

二月廿七日の条参照。

(3) 同

五月十九日の条参照。

(4) 徳川実紀元禄十五年十二月十九日の条参照。

(5) 前掲書、藩祖佐竹義宣公伝 頁六十六 によれば

元和四年七月「矢立領頭を国境とせし」と述べてゐるが、細部については不明であつたのである。

(6) 本稿(五)参照。

(7) 江戸日記正徳四年三月廿九日の条参照。

(8) 同 元禄十四年五月十日の条参照。

(9) 本稿(五)参照。

(10) 河原貞頼「現歴元法国図要録」(一東北大藏)

林鶴(博士)「和洋研究集録」下巻頁四五。

四五一参照。

おわり

元祿國絵図において、一里を三十六町と定め、一里を六寸に縮尺の統一を計り、領界は隣藩と境絵図を交換させ、地勢が符合するように、正確を期したのであった。境絵図の交換は、後の南部、津輕の烏帽子嶽附近境の論争の公儀裁定に役立っている。然し、縮尺は統一されたように見えて統一されていなかったものがある。従つて吉宗の享保尺の制定が生れてくる。⁽³⁾ 隣藩諸侯の勢力なくして、領主は領内の絵図を複製せるため、日本総図とすれば地勢が乱れ、東西南北の方向が乱れるのである。⁽⁴⁾ 享保國絵図においては、領内に三ヶ地災を求め、望視により(文会法)隣藩協力により方向を正したのであった。享保國絵図にも緯度・経度が欠けて、伊能忠敬に至つて日本総図が完成する。

筆者は私前著日記を主として元祿國絵図の複製の経緯を述べたが、荏才浅学のため、まだ老筆のため、その全貌を明らかにし得なかつた。多少と

と研究者を益することがあれば望外の幸ひであらう。

註(1)正徳三年南部領民と津輕領民と入会問題より烏帽子嶽の領境が争となり、翌四年幕吏の見分となり、同年九月幕府の裁定となつた。烏帽子嶽の争論の尸次は旧く元祿國絵図の節を争論となつてゐる。正徳四年の裁定文と絵図は私前所立回書館に藏せられてゐる。詳細については別稿に譲る。

(2)藤田元春『日本地理学史』頁二五〇。〆二六。

、近藤正奇全集才三(「好書故事」) 頁一三六。一三七 参照。

(3)高木菊三郎『日本地図測量小史』頁五七。五

ハ参照。

(4)蓮部賢『日本絵図仕立候一件』(近藤正奇全集才三 頁一。二。〆一一) 参照。

(5)前掲書『日本地理学史』、全『日本地図測量小史』参照。

(6)享保國絵図については別稿に譲る。